

りびんぐらいぶず 平成29(2017)年3月第1号

歡喜讚仰せしむれば

ご讚題

阿弥陀仏の御名をきき 歡喜讚仰(かんぎさんごう)せしむれば

功德の宝を具足して 一念大利益無上なり

(Ref 『讚阿弥陀仏偈讚』 「第三十番」 註釈版聖典 P561)

はじめに

先に「聞名ループ」というご本願文の頂戴しぶりについてご案内致しました。

これによりどのような効果がもたらされるのでしょうか。

それは、第十八願文から第十七願文に還って形成される「聞名ループ」を手掛かりに宗祖のお心を頂戴し易くなるところにあります。

特にご和讃にあっては、経典から七高僧の出拠への御文の変遷、更には親鸞聖人の筆遣いを手掛かりにできる点が大きな利点であります。

ご讚題の御文と語義の確認

御讚題は、曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』「第三十番」

「もし阿弥陀仏の号(みな)を聞きて、歡喜し讚仰し、心(しん)帰依すれば、

下(しも)一念に至るまで大利益を得、即ち功德の宝を具足すとす」に基づきます。更にそのもと、安心論題は「行一念義」の出拠の一つである『大經』流通分は弥勒付属の御文

「其れかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍(ゆやく)して乃至一念せんことあらん、まさに知るべし、この人は大利益を得とす、すなはちこれ無上の功德を具足するなり」に基づきます。

初めに語義を確認しますと、「歡喜讚仰」について、宗祖の高弟専修寺第二代真仏の筆になる浄土和讃国宝本、同三代顕智本のご左訓に「よろこびほめ仰ぐ」、「歡は身をよろこばしむるをいふなり、喜は心をよろこばしむるをいふなり」とあり、「讚仰せしむれば」とは、讚仰したてまつればとあり、「大利益」とは、涅槃に入るを大利益といふなりとあります(Ref 同 p562)。

踊躍を讚仰とされた曇鸞大師の發揮

まず、『大經』の歡喜踊躍の「踊躍」は、信心獲得の現生での利益(心多歡喜の益)を連想させます。

ところが、伝統教学では、信心獲得後の最初の一念には無上の功德が具わっているという説明が導かれるだけで「一体、どのようにすればその信心が獲得できるのですか」という伝道上重要な道行きは一向に明らかではありません。

また、「涅槃に入る」のは、釈尊はともかく、煩惱成就の凡夫にとっては、現生での利益そのものという訳には参りませんから、にわかには頂戴し難い危惧が残ります。

ところが、「踊躍」を「讃仰」に変えることによって大きな変化が生じます。これは曇鸞大師の發揮と窺われます。大師は伝えられるように伝道の人だったのです。

では、讃仰とは何か

凡夫には、諸仏讃嘆の名号を聞いて、これに付き従って称名念仏する姿を表す言葉だったのです。これには二つの理由があります。

一つは、煩惱成就の凡夫には仏を讃嘆することはできなくとも、本願力回向された大行ならば、讃嘆行になるからです。「南無阿弥陀佛をとなふるは、仏をほめたてまつるになり」(Ref『尊号真像銘文』第八条、註釈版聖典 p655)に基づきます。

今一つは、乃至十念の原語は、(諸仏如来に)付き従って念ずる意義の「随念(スムリ)」であり、藤田宏達先生のご研究により口称念仏の意義があるということでもあります。

「せしむれば」をどうよむか

次に「讃仰せしむれば」は聖人のお筆であります。御左訓に「したてまつれば」とあります。「しむ」には「使役」、「尊敬」、「謙譲」の三義がありますが、何れか一つと固定的に見るのではあまりにも平面的な見方であるというものです。

なぜなら、煩惱成就の凡夫には如来様の深い思し召しは元々分かる筈もなかったからです。

ここは、どうしても如来様の先手で頂戴するのが妥当というべきです。それは衆生に対して「せしめたまふ」お心だったのです。初めは如来様の尊い御働きをそうと知ることさえできなかった凡夫も、諸仏に等しい信心の人の後ろ姿に続いて「私もまた称えさせて戴きましょう」とお念仏すれば、それは如来様の「せしめたまふ」お心でしたから、直ちに聞こえて下さるものこそは、如来様そのお方のお喚び声だったと頂戴できるのです。「まことよのう、まことまこと(これは広島弁)」と尊ばせて戴くのはやっとその瞬間でありました。

すると、「せしむれば」の第一義は、如来様の衆生に働きかけられる「使役」だったのであり、その第二義は、尊い如来様の御働きを最後にそうと振り返らせて戴く衆生の「尊敬」だったということになります。このような頂戴し振りは、第十八願文から第十七願文に還る「聞名ループ」という仕組みに立脚しています。

聞名の歴史的背景

大田利生先生の『無量寿経の研究』 思想とその展開 には「(大経の)誓願の一つ一つが聞名往生の其れに総括されている」とあり(同書 p254)、聞名には重要な二義が秘められてあるとご指摘であります(同書 p257)。

その一つは、初期無量寿経 に見られる初門位の意義、即ち、聞名を契機に私達衆生を仏

道修行へと導き入れる重要な意義であり、

今一つは、後期無量寿經に見られる聞名自体に生因を見ていく（聞即信で直ちに正定聚不退転に就く究竟位の）意義であります。

私達が普段接する正依の大經は後期無量寿經ですから究竟位だったこととなります。

しかして「聞名」には、そうと気付くことのない初門位の聞名に発し、如来様の長い間のお育てに遇い、とうとう究竟位の聞名に達する道行きがあることが窺われます。これこそ、曾て、信楽先生が「信心の道」と仰せ下さったものであります。

これを具体的にご案内するのが本文の役目です。

それは、第十七願、第十八願を一繋がりて頂戴し、第十七願の「名号讚嘆」を聞名（成就文）し、第十八願の「信心」「十念（＝讚仰＝讚嘆）」「聞名」に繋がる聞名ループに他ならなかったことかと窺わせて戴いております。

初門位に発し、究竟位に達するお育ての道行きを明らかにご案内することは伝道のためにはとても大切な取組みだったからです。

仏教讚歌「ふとあおぎみるおすがたは」

今から二年前のこと、「ふと仰ぎ見るお姿は」という仏教讚歌が当院で誕生しました。田淵幸響布教使様が是に作曲して下さい、二年前の当院永代經でご初演戴きました。

その一番の歌詞は、

ふとあおぎみるおすがたは 救いのみなのほとけさま
されば六字となのらして となえてごらんとすすめます。

As I reverently reflect on the Figure that spontaneously comes to mind,
Amida Tathagata encourages me to recite The Six-character Name which awakens me to the path leading to emancipation.

この歌の命は「ふと」にあり、時間的にも空間的にも如来先手の働きに気付かせて戴くご縁を謳い上げたところにあります。小畑 タバサ 小都弥さんはこれを自然に(spontaneously)と名訳して下さいました。合掌。

（後書き）「六字となのらして」の「名告らす」は「使役」ではないかと龍大の先生からご指摘戴いたことがありましたが、その御心配には当たらないようです。なぜなら「名告らして」とは、「名告る」という四段自動詞の「未然形」「ら」に尊敬の助動詞「す」の連用形「し」が付いたもので用法としてはこれでよいことになるからです。合掌。

正覚寺永代經 三月四日(土)十三時半より

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会 三月五日十九時

仏教婦人会例会 三月十六日(木)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥